

## 最後の悲劇における国王と騎士

### ——アーサー王とランスロットの場合——

白井 英充子

#### I

*Le Morte Darthur* の作品全体をアーサー(Arthur)王に与えられている性格から考えてみるならば、大きく二つに分けることができる。<sup>1</sup> 作品前半部においては、自らが軍隊を指揮し、諸国を征服して、ついには無理難題を押し付けるローマ帝国をもその支配下に治め、一大アーサー帝国なるものを築き上げるという傑出した軍人としての才能が遺憾なくそこには発揮されている。一方、作品後半部においては、勇ましい活躍ぶりをみせた軍人の部分は影をひそめ、円卓の騎士集団にその栄光を譲り、恋に冒険にと忙しい優雅な宮廷の長として騎士達を統率する姿が映し出されている。それはまるで支配するが統治せずという象徴的な地位であり、また、騎士達のバトロンともいえる性格のものである。活動面から見てみても、動的な作品前半部に比べ、後半部は極めて静的なものといえる。しかし、アーサー王の心理面から見れば正にその逆になる。妻ギネヴィア(Guinevere)王妃と騎士ランスロット(Lancelot)の恋にアーサー王は夫として、また、国王として苦悩する。だが、その姿は単にコキユにされて嫉妬する夫のものではない。全体的に宮廷風恋愛の保護者としての性格を保ち、恋人たちを決して否定することはない。かえって、恋人たちに対する姿勢は最後の結末に至るまで同情的である。

And much more I am sorry for my good knyghtes losse than for

the losse of my fayre quene; for quenys I myght have inow, but  
such a felyshyp of good knyghtes shall never be togydirs in no  
company. And now I dare sey ... there was never Crystyn kynge  
that ever hylde such a felyshyp togydys. And alas, that ever  
sir Launcelot and I shulde be at debate! (1184.1-8) <sup>2</sup>

この言葉からは王アーサーにとって最大の心配事とは、貴婦人の中の貴婦人である王妃ギネヴィアを失うことではなく、アーサーをこの地上の王とさせる円卓の騎士団を自らが失うことにあるということが如実に語られている。円卓の騎士団の第一位を占める騎士ランスロットを失うことは、円卓の騎士団の団結と友情の象徴を失うことであり、円卓の騎士団の存在をも危うくすることを意味していた。それ故、アーサー王はランスロットとギネヴィアの恋人たちに常に寛大な態度を示し続けるのであるが、最終的に恋人たちはアーサー王から円卓の騎士団を奪うばかりか命までも奪うという皮肉な結果を招くのである。

一方、ランスロットは、“the moste man of worship of the worlde” (126.6-7) であり、“of a more renommed man myght ye nat be made knyghte of, for of all knyghtes he may be called cheff of knyghthode” (316.21-23) であるが故に、アーサー王にとっては数多くの騎士達の中で第一番の騎士であり、王からも最大の信頼を受けていた。また、ランスロットもアーサー王に対しては心からの忠誠心を捧げていた。アーサー王がパロミデス(Palomydes)に馬から叩き落とされてしまった時、王のお共をしていたランスロットがパロミデスに恐怖心を感じながらも、“Natwythstondynge, whethir I lyve or dye, nedys muste I revenge my lorde Arthure, and so I woll, whatsomever befalle me” (744.11-14) と決意したように、アーサー王とランスロットの間には国王と騎士の関係において相互に理想的な主従関係が堅く築かれていた。

しかし、王妃ギネヴィアを前にアーサー王とランスロットが対峙した時、国王と騎士という理想的な二人の関係は無常にも綻び始め、最後の悲劇へと物語は進行していく。この事実だけをみてランスロットと

ギネヴィアの恋が最後の悲劇の原因を為したというのは簡単なことであろう。だが、アーサー王が結婚前にマーリン(Merlin)によってギネヴィアの裏切りを既に予言されていることから、王自身の第一の騎士ランスロットとギネヴィアの恋は当初から予測されていたことである。しかし、二人の恋が最後の悲劇の原因であったと仮定するにせよ、また、栄光ある者は滅びの道を辿るというのが英雄物語の常套手段であるというにせよ、アーサー王は余りにも安易にその運命に身を委ね過ぎてはいないだろうか。ランスロットとギネヴィアの恋が芽生え、発展し、ついには最悪の事態をアーサー王とその宮廷に招くまでの時間の経過の中に、アーサーは国王として何を思案し、どのように問題を把握していたのか。また、ランスロットは王と王妃の狭間で何を感じ、どのように問題に対処しようとしたのか。アーサー王とランスロットが自らを最後の悲劇へと導く運命に対してそれぞれどう対応していったのかを考察することによって、ランスロットとギネヴィアの恋以外にも最後の悲劇の原因を為す別の要因があったのではないか、その可能性を探ってみたいと思う。

## I I

アーサー王——ギネヴィア王妃——ランスロットという三人が初めて同じ舞台上に登場するのは、アーサー王のローマ帝国征服を目の前にした時であった。

Hit befelle whan kyng Arthur had wedded quene Gwenyvere and  
fulfyllled the Rounde Table, and so aftir his mervelous  
knyghtis and he had venquyshed the moste party of his enemyes,  
than sone aftir com sir Launcelot de Lake unto the courte, and  
sir Trystrams come that tyme also, and than kyng Arthur helde  
a ryal feeste and Table Rounde. (185.1-7)

この時点において、アーサーは既にイギリス国王としての権力と地位を

確立しており、残るは世界の皇帝の位を目指すのみであった。そして、もちろんランスロット、トリスタン(Tristram)という円卓の騎士団の重要なメンバーも顔を揃え、ローマ帝国遠征のみならず、来るべき様々な冒険に対して万全の準備が整えられていたのである。

ギネヴィアが貞節な女性でないことは、マーリンの警告により、結婚前からアーサーには既にわかっていた事実であった。だが、あえて結婚したのは、ギネヴィアのいわゆる持参金というべきものの中に円卓の騎士団が含まれていたためであり、アーサーがこの地上の王になるためには円卓の騎士団は必要不可欠のものであった。そんな疑惑の女性ギネヴィアをアーサーはローマ帝国遠征に赴く際、彼の王権の代行と共にボードゥアン(Baudwen of Bretayne)等に委ねた。<sup>3</sup> トリスタンにはイゾルデ(Iseult)への愛のためにマーク王(Mark)のもとに残ることを許したのとは極めて対称的である。ランスロットはこれに対してももちろん“passyng wrothe”(195.10)な状態であったが、ギネヴィアはアーサー王や他の者たちとの別れに悲しみを覚えたところに対して、ランスロット個人には何の気持ちも表してはいない。この段階においては、ランスロットのギネヴィアへの愛は明らかなものと提示されているが、その愛の心はギネヴィア本人にはまだ届いてはいなく、夫アーサー王にも気付かれていないとみるのが妥当だと思われる。

ギネヴィアがランスロットの気持ちに答えるかのように“in grete favoure”(253.16)を彼に示し始めたのは、ローマ帝国征服の大勝利の後、アーサー王の宮廷が再びイングランドに戻り、その華やかな宮廷生活を取り戻してからであった。

...at no tyme was he ovircom but yf hit were by treson other  
inchauntement. So this sir Launcelot encresed so mervaylously  
in worship and honoure; therefore he is the fyrste knyght that  
the Freynsh booke makyth mencion of aftir kyng Arthure com  
from Rome. Wherefore quene Gwenyvere had hym in grete favoure  
aboven all other knyghtis, and so he loved the quene agayne  
aboven all other ladyes dayes of his lyff, and for hir he dud

many dedys of armys and saved her from the fyre thorow his  
noble chevalry. (253.10-19)

ランスロットがギネヴィアから示された“in grete favoure”とは、ランスロットが全ての騎士の中で、騎士道のあらゆる点において勝っているために、貴婦人の頂点に立つ王妃ギネヴィアが掛けた「好意」であって、その内容は決して恋愛そのものではない。ルミアンスキーも指摘しているようにここにおいてギネヴィアは自分の愛をランスロットに与えたという徴候を見ることは出来ないのである。<sup>4</sup> 王妃に忠誠を誓う全ての騎士達は言わば皆、王妃ギネヴィアの恋人といえる存在であり、“grete favoure”を許される騎士とは他の大勢の中では最高の騎士という資格が与えられたということを意味しているにすぎないのである。

ランスロットは、王妃ギネヴィアへの愛のために彼の最高の“noble chevalry”を実践しようと努めた。このランスロットの心情はムーアマンの次の言葉に要約される。

Properly and devoutly followed, the service of the beloved prompts a man to reveal in action the noblest feeling possible to him; he is required to demonstrate the sincerity and depth of his love by displays of unusual courtesy, generosity, and bravery.<sup>5</sup>

騎士道の中では愛の奉仕は最も特徴的なものと位置付けられる。騎士道におけるこの愛の掟に従い、ランスロットは冒険を求めて遍歴の旅に出掛け、勝者になる度に敗者に対して、“ye shal yelde you unto dame Gwenyvere, and loke that ye be there on Whytsonday and yelde you unto hir as presoners”(276.34-36)と申し渡し、ギネヴィアへ騎士道の名誉を捧げるのである。この愛の奉仕の究極的な例としてランスロットにおいてその好例を見付けるとするならば、毒リンゴの物語における火炙りの刑、荷車の騎士の物語、そして、アーサー王の死の物語におけるギネヴィアの救出、という三例を挙げることが出来る。

しかし、そのような騎士道の愛の掟に基づく理想的な関係を結んでいたラーンスロットと王妃ギネヴィアではあるが、その関係が人々に当然知られるものとなっていくと同時に、人々は王妃と騎士の理想的な愛に内包する危険な部分に目を向け始めた。四人の王妃たちと一人の乙女がラーンスロットにギネヴィアへの想いを尋ねたのもそのような疑惑を持った人々を代表してのことであった。アーサー王の姉であるモルガン・ル・フェイ (Morgan le Fay) を含む四人の王妃たちは、ラーンスロットをその “worthynesse” と、“the noblest knyght lyvyng” (257.26-27) であるために愛し、ラーンスロットがギネヴィアに向けている愛を魔法によって自分たちに向けようとする。自分たち四人の中から一人を選ぶように迫られた時、ラーンスロットはそれを拒絶するとともに自分のギネヴィアへの愛を次のように説明している。

I woll none of you, for ye be false enchaunters. And as for my lady, dame Gwenyvere, were I at my lyberté as I was, I wolde prove hit on youres that she is the trewste lady unto hir lorde lyvyng. (258.3-6)

ラーンスロットのこの言葉からはギネヴィアに対する愛とは、まだ “grete favoure” の領域のものであることがわかる。また、さらに、一人の乙女がラーンスロットに対して彼が “the curteyst knyght” であり、“mekyste unto all ladyes and jantylwomen that now lyvyth” (270.16-17) であるにもかかわらず、妻も持たずにギネヴィアを愛することは非常に哀れむべきことであるばかりか、ひいてはアーサーの王国に不運をもたらすであろうと非難したとき、ラーンスロットは次のように自らを弁護し、正当化しようとした。

Fayre damesell, ... I may nat warne peple to speke of me what hit pleasyth hem. But for to be a weddyd man, I thynke hit nat, for than I muste couche with hir and leve armys and turnamentis, batellys and adventures. And as for to sey to

take my pleasaunce with paramours, that woll I refuse: in  
prencipall for drede of God, for knyghtes that bene adventures  
sholde nat be advoutrers nothir lecherous, for than they be  
nat happy nother fortunate unto the werryys. (270.28-36)

このラーンスロットの弁明については、ルミアンスキーはラーンスロットのギネヴィアに対する恋心を隠すために意識的に行った“half-truth”の言葉であるとしているが、<sup>6</sup> 一方、ムーアマンはラーンスロットの間違えようもない“sincereness”を表す言葉であるとしている。<sup>7</sup> ラーンズロットはギネヴィアへの愛を否定していないという事実に加えて、“I am trew knyght”(259.12-13)とも断言し、断固として自分の潔白を主張していることを肯定的にとらえた意見である。“in prencipall for the drede of God”に生きるという言葉は、作者マロリー(Sir Thomas Malory)が最も重んじた愛、“first reserve the honoure to God, and secundely thy quarell muste com of thy lady. And such love I calle vertuouse love”(1119.28-30)をラーンスロットが自ら実践し、“vertuouse lover”であることを示すものである。

以上のように、ラーンスロットは四人の王妃たちと一人の乙女によるギネヴィア王妃への愛の問いに対して否定をした。そして、ギネヴィア王妃がラーンスロットの愛を受けとめたということについても何も語られていない。この時点において、ラーンスロットが望んでいたギネヴィアとの関係というのは自分の君主の奥方として彼女を敬い、仕えるという、文字通りの“vertuouse lover”であったと考えられる。

それでは何時ラーンスロットとギネヴィアの恋が“adulterous love”として明らかなものとされたかというならば、まず、トリスタンの恋人イゾルデのギネヴィアへ宛てた手紙の中にそれを見ることができよう。“there be within this londe but foure lovers, and that is sir Launcelot and dame Gwenyver, and sir Trystrames and quene Isode”(425.29-32)とイゾルデは自分たちの恋とギネヴィアとラーンスロットの恋は同じ性質のものであることを指摘した。また、ラーンスロットに拒絶され、愛を憎しみに変えたモルガン・ル・フェイは、王と王妃

と騎士の三角関係を暗示した絵の付いた盾によって二人の恋をアーサー王と宮廷に暴露しようと画策した。しかし、ラーンスロットは二人の“adulterous”な関係がこのように露顕されたという明らかな状況にもかかわらず、依然として、ギネヴィアとの恋を否定する。だが、彼の発言とは裏腹に二人の愛は“adulterous love”の様相を一層濃くし、次第に宮廷中の噂となっていった。マロリーがラーンスロットとギネヴィアの物語の典拠とした古フランス語の *Lancelot* では二人の“adulterous love”は明白なものと語られていたが、マロリーは二人の恋における“adultery”な部分には焦点をおくことを避け、“grete favoure”な“vertuouse love”が、次第に“adulterous love”に墮落していく過程に重点を置いている。<sup>8</sup> その結果、ラーンスロットとギネヴィアが互いに“adulterous”に愛し合っているという決定的な証拠が明示されていないにもかかわらず、二人の愛に対して大きな疑惑が私たち読者には残り、困惑させられてしまう。

マロリーが何故ラーンスロットとギネヴィアの愛に原本と異なる解釈をしたのかについては、ラーンスロットを神に対していかに敬けんな騎士であるかを強調した点にその理由を見ることができよう。

- (1) Damesell, I shall not fayle, by the grace of God.  
(259.19)
- (2) ... I promyse you, by the leve of God, for to rescowe  
that knyght. (265.15-17)
- (3) God gyff hym joy that this spere made, for there cam  
never a bettir in my honde. (278.4-5)
- (4) Now God sende you bettir comforte. (279.11)
- (5) Nay, ... that God me forbede (281.6)
- (6) ... Jesu preserve me frome your subtile crauftys!  
(281.21-22)
- (7) And there, by the grace of God, ye shall fynde me.  
(282.8-9)

特に(7)の言葉は“holy men”や“Grail knights”に対してのみ使わ



れるものである。<sup>9</sup> このような強調は次にくる物語の聖杯探求の冒険を控えて、ラーンスロットに“Grail knight”としての資格を与えるために為されたものである。ラーンスロットの唯一の欠点である“adulterous”な性格を取り除き、“Grail knight”に可能な限り近付けたいというマロリーの意図が働いたものといえよう。<sup>10</sup>

### I I I

聖杯探求の冒険はラーンスロットにとってギネヴィアとの“adulterous love”のために失敗に終わる。だが、このことは既に二人の関係を知る宮廷の人々にとっては何ら不思議に思うことではない。アーサー王にとってもマーリンの予言で既に知らされているわけだから予測できたことである。だが、アーサー王には聖杯探求以前において実際にラーンスロットとギネヴィアの恋に気付いたという素振りはない。モルガン・ル・フェイの盾による陰謀にしても驚きはするが恋人たちに対してどのような反応を示したかを見ることは出来ない。また、モルガン・ル・フェイの侍女に“Sir kyng, wyte you well thys shylde was ordayned for you, to warn you of youre shame and dishonoure that longith to you and youre quene.”(557.33-35)と言われても、アーサー王は信じようとはしない。何故ならば、王自らが目にしたことではないからである。それ故、聖杯探求後もアーサー王はラーンスロットとギネヴィアの恋に気付く素振りを見せないまま、ラーンスロットを始めとする円卓の騎士達が自らのもとのに戻り、再団結したことに喜びと満足を覚えるのである。

しかし、このような王の気持ちに反比例するように、ラーンスロットは聖杯探求の際に神に誓った約束を破り、宮廷に戻るやいなや、ギネヴィアとの“adulterous love”は再燃される。

... and so they loved togydirs more hotter than they dud

toforehonde, and had many such prevy draughtis togydir that  
many in the courte spake of hit, and in especiall sir  
Aggravayne, sir Gawaynes brothir, for he was ever  
opynnemowthed. (1045.17-21)

宮廷中が二人の恋については知っていた。このような状況においてアーサー王も知らないとは考え難く、この時点で、アーサー王も二人の恋に当然疑惑を持ったと推測されるが<sup>10</sup>、その証拠を見付けることは出来ない。何故ならば、依然として、アーサー王は二人に対して無関心の態度を取り続けるからである。

一方、ラーンスロットも“there be many men spekith of oure love in thys courte”(1046.15-16)と自分たちを巡る噂を無視できない状態に追い込まれ、ギネヴィアへ超然とした態度を示し始めた。当然、それはギネヴィアの怒りを招く結果となる。

Sir Launcelot, now I well understonde that thou arte a false,  
recrayed knyght and a comon lechourere, and lovyste and  
holdiste othir ladyes, and of me thou haste dysdayne and  
scorne. (1047.1-4)

ギネヴィアはラーンスロットに対して宮廷追放を持って怒りを露にする  
が、この怒りの許しは、ギネヴィアが毒リンゴの事件においてラーンス  
ロットに救い出されるまで待たなければならない。以前までは影の薄い  
人物像を与えられてはいたが王妃として威厳と慈愛を旨としたギネヴィ  
アにしては想像もつかない嫉妬心と短気という極めて人間的な性格をこ  
こにおいて露にした。マロリーの描く人物像の中でギネヴィアは王妃で  
あるとともに最高の騎士に愛されるという役回りには、マロリーか  
らは必ずしも好意的な描き方をされていないように思われる。ラーンス  
ロットとの間にガラハッド(Galahad)をもうけたイレイン(Elaine of  
Corbenic)は、ギネヴィアが既婚の身でありながらラーンスロットを恋  
人を持つことを非難し、また、ボルス(Bors)はギネヴィアに対して、

“now have ye loste the beste knyght of oure blood”(808.8)とあからさまに批判を浴びせている。毒リンゴの事件においても宮廷中のものが、“as for quene Guenyvere, we love hir nat, because she ys a destroyer of good knyghtes”(1054.3-4)とギネヴィアに不信感をもつ有様であり、事件の疑惑を払ってくれる騎士は恋人ランスロットしかいなかった。このように最高の騎士ランスロットとは不釣合な性格を物語の後半にいくにしたがい殊更にギネヴィアに与えていったのは、読者の眼を最後の悲劇の原因が動きのあるランスロットに集中することを避け、今まで受動的であったギネヴィアの方に多くを負わせようというマロリーの意図が働いたものと思われる。

アーサー王がランスロットとギネヴィアの恋に疑惑を持っているのが明らかになるのはウィンチェスターで行われる馬上試合大会を控えての時である。ランスロットとギネヴィアは宮廷の人々の噂通りに二人とも試合に赴くことを断った。これに対して、アーサー王は“hevy and passynge wroth”(1065.25)であった。だが、もっとも後でランスロットが変装して馬上試合に参加したことが判った時、その激怒は鎮まった。円卓の騎士団の第一位のランスロットがいなくては馬上試合も盛り上がらない、また、噂の二人が欠席というのでは一層その噂は大きくなり収拾がつかなくなる、という理由に基づく激怒であった。この段階で、アーサー王は二人の恋に対して始めて自らの気持ちを漏らしたとたといえるであろう。また、ランスロットに恋い焦がれて死んでしまったアストラットの乙女イレイン(Elaine le Blank)の亡骸が宮廷に流れ付いた時、ギネヴィアはランスロットに対して、“ye myght have shewed hir sombownte and jantilnes whych myght have preserved hir lyff”(1097.14-15)と皮肉にも忠告したのに対して、ランスロットは次のように真剣に答えるのである。

... she wolde none other wayes be answerde but that she wolde be my wyff othir ellis my paramour, and of thes two I wolde not graunte her ... I love nat to be constrayned to love, for love muste only aryse of the harte selff, and nat by none

このランスロットの愛における考えに対して、アーサー王はランスロットに、“That ys trouth,...and with many knyghtes love ys fre in hymselffe; and never woll be bonde; for where he ys bonden he lowsith hymselff”(1097.25- 27)と以外にも賛成の意を示した。騎士の恋に対して始めてアーサー王が介入し、自らの考えを述べたものであると同時に、ランスロットとギネヴィアの“adulterous love”を黙認したと認めることができよう。また、最後の悲劇を目の前にして、アーサー王の名誉を最大限に誇示しようとするかのように円卓の騎士達の全員集合による大馬上試合が催された時にもアーサー王は同じように疑惑の念を持っていることが明らかにされる。この時、変装したランスロットがアーサー王側の騎士達と二手に別れて戦うのは、最後の悲劇における戦いでアーサー王とランスロットが敵対するという運命を暗示している訳であるが、この大馬上試合の閉幕の締め括りの言葉として王自らここにおいて騎士道の手本なる掟を唱えた。

... a worshypfull knyghtes dede to help and succoure another  
 worshypfull knyght whan he seeth hym in daungere. For ever a  
 worshypfull man woll be lothe to se a worshypfull man shamed,  
 and he that ys of no worshyp and medelyth with cowardise never  
 shall be shew jantilnes nor no maner of goodnes where he seeth  
 a man in daungere, for than woll a cowarde never sher mercy.  
 And allwayes a good man woll do ever to another man as he  
 wolde be done to hymselff. (1114.21-29)

円卓の騎士団の結成の基本理念というべきものをここにおいて改めてアーサー王が提言したことは、ギネヴィアへの愛を示す金色の袖を兜に付けて戦ったランスロットに対して二人の“adulterous love”の疑惑を承知しながらもそれを円卓の騎士団の栄光のためであるならば不問に付すことを意味している。すなわち、“Arthur's hopes were high for a

brave new world guided by the chivalric virtue of his utopian fellowship”<sup>11</sup>をここにおいて再確認したのである。

アーサー王の心の中でランスロットとギネヴィアに対する疑惑を動かしようのない真実へと変化させていったものは、王の心の中から芽生える内因ではなく、外因によるものであった。以前からギネヴィアに恋していたメリアガント(Meliagaunt)は、ギネヴィアが傷を負ったランスロットと一夜を共にしたため、その寝床がランスロットの血で汚れているのを発見してギネヴィアを反逆罪で訴えた。アーサー王はここで始めてギネヴィアが背信行為を行ったという事実と直面し、その判断を求められるが、ここにおいてもアーサー王の態度は以前と変わらない。

... for I dare say all that sir Mellyagaunce puttith uppon my  
lady the quene ys wronge. For I have spoken with all the ten  
wounded knyghtes, and there ys nat of them, and he were hole  
and able to do batayle, but he wolde prove uppon sir  
Mellyagaunce body that it is fals that he puttith uppon my  
lady (1137. 24-29)

しかも、ギネヴィアの罪を晴らすためにランスロットにメリアガントと戦うことを欲するのである。この時点において、ギネヴィアの相手がランスロットであることは状況全てが指し示す明白な事実であって、アーサー王がそれを知らないということは有り得ないことである。<sup>13</sup> アーサー王の心中にランスロットとギネヴィアへの疑惑の念が芽生え、やがてそれが明白なものとして示唆されていくにつれ、そして、王の周囲が二人の恋に騒げば騒ぐほど、アーサー王とギネヴィアはランスロットに対して、“than the kynge and the quene made more of sir Launcelot, and more was he cherysshed than ever he was aforehande” (1140. 11-13)な態度をもって接した。アーサー王は円卓の騎士団の名誉のために、そして、ギネヴィアは自分の欲望のために。王と王妃の個人的なランスロットへの思入が宮廷の人々の王妃と騎士の恋に対する疑惑と不信感を無視して強くなるにつれて双方の溝は深まり、

物語は最後の悲劇を迎えるべく準備を整えていくのである。

#### IV

最後の悲劇の序幕はアグラヴェイン(Aggravain)の告発で幕を開ける。ランスロットとギネヴィアの“adulterous love”をアグラヴェインはアーサー王に告げるが王の態度は以前と変わることなく、告げ口という不十分な証拠に基づく問題には無視の姿勢を崩そうとはしない。

For, as the Freynshe books seyth, the kyng was full lothe  
that such a noyse shulde be uppon sir Launcelot and his quene;  
for the kyng had a demyng of hit, but he wold nat here  
thereoff, for sir Launcelot had done so much for hym and for  
the quene so many tymes that wyte you well the kyng loved hym  
passyngly well. (1163. 20-25)

アーサー王も既にアグラヴェインと同様にランスロットとギネヴィアのことは承知していた。だが、アグラヴェインの告発に乗らなかったのは“an hardy knyght”であり、“the beste knyght among us all”(1163. 14 / 15-16)であるランスロットを敵に回すことの恐ろしさと、それが招くであろう破滅の運命を感じとってのことであった。しかし、これも新たなアグラヴェインとモードレッド(Mordred)の執拗な告発にあった時、アーサー王の心も変化し始める。ランスロットとギネヴィアの愛の現場を押さえ決定的な事実をアーサー王に示すと意気込む二人に対してその許可を与えるとともに、王自らが狩りに出掛け、夜、恋人たちを二人だけにするという陰謀にまで加わった時、今まで、ランスロットには寛容な態度を取ってきたアーサー王の運命は破滅の方へ確実にその車輪を回し始めた。

ランスロットとギネヴィアの恋を執拗に追うアグラヴェインとモードレッドとは対照的に二人の兄弟であるガウエン(Gawain)は、始め、ア

ーサー王の立場にたっていた。恋人たちがその現場を押さえられた時でさへ次のようにラーンスロットを弁護した。

One ys thys, thoughe hyt were so that sir Launcelot were  
founde in the quenys chambir, yet hit myght be so that he cam  
thydir for none evyll / And peradventure she sente for hym for  
goodnes and for none evyll, to rewarde hym for his good dedys  
that he had done to her in tymes past.

(1174.33-1175.2 / 1175.6-8)

ガウエンはラーンスロットの良き親友であり、聖杯探求の冒険の際にラーンスロットから、“sir Launcelot loved hym muche more than any other”(1020.9-10)と認められるほどの仲であったが故に、ラーンスロットに対してアーサー王と同じような寛大な態度を取ることができた。しかし、彼の兄弟であるガレス(Gareth)とガヘリス(Gaheris)がラーンスロットとギネヴィアの恋を発端とする戦いで誤ってラーンスロットに殺されるという個人的な事件をもとに、ガウエンのラーンスロットに対する態度は一変し、憎しみと復讐に取って替わった。<sup>12</sup> そして、これが最後の悲劇を招く致命的な戦いを誘発した。一方、アーサー王は今や王妃と騎士の間の“adulterous love”のために円卓の騎士団は王対ラーンスロットという二つに分裂してしまうという悲劇に直面する。そして、アーサー王の嘆きは始まるのである。

Alas, that ever I bare crowne uppon my hede! For now have I  
loste the fayryst felyshyp of noble knyghtes that ever hylde  
Crystyn kynge togydirs. Alas, my good knyghtes be slayne and  
gone away fro me, that how within thys two dayes I have loste  
nygh fourty knyghtes and also the noble felyshyp of sir  
Launcelot and hys blood, for now I may nevermore holde hem  
togydirs with my worshyp. Now, alas, that ever thys warre  
began!

(1183.7-14)

アーサー王の悲しみは甥のガウエンとは異なり、円卓の騎士団の崩壊にあった。それ故、円卓の騎士団の第一騎士であるランスロットに対して“there was never Crystyn kynge that ever hylde such a felyshyp togydyrs. And alas, that ever sir Launcelot and I shulde be at debate!”(1184.6-8)という気持ちを依然として持ち続けることができるのである。しかし、アーサー王の意志は弱い。アグラヴェインとモードレッドの陰謀の片棒を担ぐ様な真似をしたように、最後の運命の戦いにおいてもランスロットと互いに和解を望んでいるにもかかわらずガウエンのランスロットへの憎しみと復讐という激情に抑えられてしまい、叶わない。アーサー王は物語の最後にきて性格の弱さを出してしまう結果となるのである。

## V

アーサー王が円卓の騎士団を率いて、“knightly virtues”による理想の王国をこの地上に建設しようとした時から、ランスロットはその最も重要なメンバーとしてアーサー王の理想実現を担ってきた。言わば、ランスロットは円卓の騎士団そのものであった。ガウエンのアグラヴェインへの、“there aryse warre and wrake betwyxte sir Launcelot and us, wyte you well, brothir, there woll many knyges and grete lordis holde with sir Launcelot”(1162.3-6)という忠告は最後の戦いにおいて皮肉にも証明されたが、名前だけの支配者によりも真に実力のある者に人々はなびくという力の原理を示したものである。それ故、アーサー王は王妃ギネヴィアとランスロットの関係が“adulterous love”へと進行していてもランスロットを味方に付け、円卓の騎士団の団結を計ろうと沈黙した。また、ウルリー(Urry)の治癒におけるランスロットの成功もこの理由によるものであった。聖杯探求後の宮廷に世界で最も立派な騎士に傷を診てもらわなければ全快しないというウルリーが訪れるが、当然、聖杯探求に失敗しているランスロットは彼



の治療を躊躇した。ところが、アーサー王の強い希望によって試したところ不思議にも成功する。この成功の意味することは、アーサー王がランスロットに課したウルリーの治療の目的はランスロットが世界で最も立派な騎士であると証明することではなく、ランスロットに王である自分にどれだけ忠誠を尽くしているかを試すテストであるということにあった。アーサー王に忠誠を尽くすという行為の象徴的な形はどれだけランスロットが円卓の騎士団の団結に貢献できるかということに代表される。ランスロットによるウルリーの治療の成功は、アーサー王とランスロットの関係が至極良好であるということも物語っている。

以上のように、アーサー王は自分の理想のためにランスロットとギネヴィアの恋に目をつぶった。だが、その理想追及の精神は必ずしも強固なものではない。何故ならば、アグラヴェインとモードレッドの陰謀を許すばかりか、自らも荷担するという過ちを犯す。また、最後の致命的な戦いを招くガウエンのランスロットへの憎しみを何ら抑えることが出来ないばかりか、その激情にアーサー王自身が左右されるという結果となる。ランスロットに対してアーサー王の身内の者たちが反目し始めた時、既に、最後の悲劇は始まっていた。ランスロットとギネヴィアの“adulterous love”はその反目を誘引するものにすぎない。最後の悲劇の真の原因を求めるとするならば、それはアーサー王自身にあるといえるであろう。理想追及の不完全さ、そして、円卓の騎士団の中における不和と反目を解決できないでいるアーサー王の精神的弱さと国王としての統治能力にその原因を見るのである。

注

- (1) *Le Morte Darthur*を全体に一つの物語としてみなす立場(Caxton版)と八つの独立した物語の集まりとみる立場(Vinaver版)とその中間的なものとみなす立場がある。ここではテキストとしてVinaver 版を使用した。作品全体を一つの物語として論を進めた。
- (2) テキストの引用は以下全て Eugène Vinaver(ed.), *The Works of Sir Thomas Malory* 3vols., (Oxford: Clarendon Press, 1990) による。
- (3) トリスタンとは対照的にラーンスロットだけが恋人の側を離れなければならないという記述はマロリーの典拠とした頭韻詩 *Morte Arthure* にはない。
- (4) R.M.Lumiansky, ed., *Malory's Originality* (Baltimore: The John Hopkins Press, 1964), p.95.
- (5) Charles Moorman, *The Book of King Arthur* (University of Kentucky Press, 1965), p.15.
- (6) Lumiansky, pp.96-97.
- (7) Moorman, p.18.
- (8) Lumiansky, pp.97-98.
- (9) Beverly Kennedy, *Knighthood in the Morte Darthur* (Arthurian Studies XI), (Cambridge: D.S.Brewer, 1985), p.114.
- (10) Lumiansky, p.111.
- (11) Lumiansky. p.222
- (12) 最後の悲劇において重要な役割をするガウエンの性格は次のように描写される。“Gawain has the bad and good in his mind. The bad stems from his emotional and instinctual characteristics and the good from the civilizing and Christian influences around him. Gawain's tragedy is that the opposing forces within him come into strong conflict, and the baser side prevails long enough to have catastrophic effects” Lumiansky, pp.265-266.

## BIBLIOGRAPHY

### Text

- Vinaver, Engène. ed., *The Works of Sir Thomas Malory*. 3rd ed.  
3vols. Revised by P.J.C.Field. Oxford: Clarendon Press, 1990

### Criticism

- 青山 吉信 『アーサー伝説——歴史とロマンスの交錯』 岩波書店、1985.  
阿部 謹也 『西洋中世の男と女——聖性の呪縛の下で』 筑摩書房、1991.  
Barber, Richard. *King Arthur in Legend and History*. London:  
Cardinal, 1973.  
..... *The Knight and Chivalry*. Ipswich: The Boydell Press, 1974.  
Capellanus, Andreas. *The Art of Love*. trans. John Jay Parry. New  
York: Columbia University Press, 1964.  
Crane, Susan. *Insular Romance*. Berkeley: University of California  
Press, 1986.  
Field, P.J.C. *The Life and Times of Sir Thomas Malory*. Cambridge:  
D.S.Brewer, 1993.  
Keen, Maurice. *Chivalry*. London: Yale University Press, 1984.  
Kennedy, Beverly. *Knighthood in the Morte Darthur*. Cambridge:  
D.S.Brewer, 1985.  
Kerrel, Peter. *An Arthurian Triangle*. Leiden: E.J.Brill, 1984.  
Loomis, Roger Sherman. *The Development of Arthurian Romance*.  
London: Hutchinson University Library, 1963.  
.....ed., *Arthurian Literature in Middle Ages*. Oxford: Oxford  
University Press, 1969.  
Lumiansky, R.M. *Malory's Originality*. Baltimore: The John Hopkins  
Press, 1964.  
McCarthy, Terence. *Reading the Morte Darthur*. Canbridge: D.S.Brewer,  
1988.  
Moorman, Charles. *The Book of King Arthur*. University of Kentucky

Press. 1965.

Vinaver, Eugène. *The Rise of Romance*. Oxford: The Clarendon Press, 1971.

Whitaker, Muriel. *Arthur's Kingdom of Adventure*. Cambridge: D.S.Brewer, & Noble, 1964.

Wilhelm, James J. *The Romance of Arthur II*. New York & London: Garland Publishing, 1986.